

# 大東BOOKS

第21号 2012年6月30日



図書館からのお知らせ	1
メタファーという仕掛け — 古典文学への招待 —	3
「スタンダード」新聞の日本海海戦記事	7
俘虜収容所の遊びと憩いの交流	10
「さわやかシェイプアップエクササイズ」で 健やかな心と身体を手に入れましょう!	17



## 図書館からのお知らせ

### // 祝祭日の開館 //

2012年7月16(月)海の日は、通常授業が行われるため、図書館は通常開館となります。

### // 前期定期試験のための開館時間延長等 //

6月、7月は、土曜日の開館時間を延長します。

- ・6月は2日、9日、16日、23日、30日の各土曜日、  
7月は7日、14日、21日、28日の各土曜日の開館時間を延長し、  
閉館時間を18時30分とします。

レポート作成の準備や試験勉強などにぜひご利用ください。

- ・7月2日（月）から8月1日（水）まで、「グループ学習室」を開放します。  
「グループ学習室」を試験勉強のための座席として利用してください。ただし、グループ予約を優先します。

## // オープンキャンパスによる開館案内 //

2012年度「オープンキャンパス」に伴い下記の日を特別に開館いたします。

- ・板橋キャンパス：7/29（日）、12/2（日）
- ・東松山キャンパス：7/21（土）、7/22（日）、8/25（土）、8/26（日）、10/7（日）

※ 開館時間：10：00～オープンキャンパス終了まで。  
貸出・返却はできません。館内閲覧のみとなります。

## // 夏季休暇中の開館・休館について //

夏季休暇中の開館・休館は下記のとおりになります

- ・開館時間は、平日が9時～17時、土曜日が9時～16時30分です。  
8月中の土曜日は休館となります。  
8月13日（月）～8月15日（水）と8月23日（木）～8月24日（金）の一斉休暇日は休館となります。

詳細は図書館ホームページの開館カレンダーをご覧ください。

## // 夏季長期貸出について //

2012年7月20日（金）から長期貸出をします。  
返却日は10月1日（月）までです。ご利用ください。

## // 図書館資料の複写に注意 //

図書館では、サービスの一環として図書資料の複写のためだけにコピー機を設置していますが、図書を全部コピーすることは著作権法違反となります。  
ノート・プリント類のコピーもできません。ご注意ください。

## // 蔵書点検 //

下記の期間、蔵書点検を実施します。図書館は開館（部分開館）しております。  
騒音等でご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

- ・板橋（書庫棟）実施日：2012年8月2日（木）～9月5日（水）
- ・東松山実施日：2012年8月3日（金）～9月15日（土）

## メタファーという仕掛け

### — 古典文学への招待 —

図書館長 小谷野純一

(文学部日本文学科教授)

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。わたしたち図書館スタッフ一同、心よりお慶び申し上げる次第です。

未曾有のあの大地震から 1 年を経過しましたが、復興への道のりの厳しさのなかで、それでも、少しずつ確実に新たな活力が生成されています。みなさんも、わが国のおかれている困難な現況に目配りしつつ、力強くともに飛翔していくことを念じてやみません。

みなさんは、それぞれの希望により学科に所属し、4 年間の大学生活を送ることになりますが、大学の教育、研究の中核に存在するのが、知の拠点というべき図書館にほかなりません。これから、まさに日々の大学生活のなかで、しげく足を運ぶ空間になるものと思います。授業の合間や課外時間における講義の予習、復習はもとより、長期休暇中のレポート作成のために活用することにもなるでしょう。そうした修学生活のなかで、利用上の疑問や質問がありましたら、いつでも、わたしたち、図書館スタッフにお尋ねください。専門館員が適切に対応し、問題の解決に向け、お力添えをしてみたいです。

大東文化大学には、板橋校舎と東松山校舎にそれぞれ図書館が別個に設置されています。蔵書数は、両館合わせ、約 132 万冊に及び、いうまでもなく、各学問分野をカバーするこのきわめて充実した内容については、他大学と比較しても遜色はありません。貴重な専門書も数多く所蔵されていますから、高度な研究に関しても充分、応じることができます。ですから、みなさんの学習や研究の度合いに合わせての対応というものが果たし得ますので、前述のように、大学の知の拠点であるこの図書館なる共有空間を大いに利用して欲しいと思います。

さて、ここで、今回の眼目である標題のことがらに話題を移しましょう。

古典文学、直接には、平安文学を例としてのおはなしになりますが、たぶん、みなさんの多くは、古典そのものに対して拒否反応をいっているのではないのでしょうか。文法は難しい、ことばは外国語のようで馴染みにくいなどという呻きが聞こえてきそうです。

実際、高等学校の授業では、テキスト全体を取り上げるのはとうてい無理ですから、抄出した部分の集合体である教科書を用いるほかはないわけで、しかも、カリキュラム上限定された国語の教科書の時間内では、せいぜい大づかみに展開を追い、語句の解釈や文法的な説明を加える程度の作業で切り上げるのが精一杯というところでしょう。

たしかに、こういった授業のあり方では、古典が毛嫌いされるという事態も分からないでもありません。すなわち、生徒たちは、テキストの時空への歩みとは無縁なまま、いうなれば、途方にくれた状態で放擲してしまうといった按配なのですね。

しかしながら、大学に入ったからには、文学として対峙するという眼を拓いて欲しいと願うものです。切り取られた国語の一教材ではなく、躍動する自立的創造世界たるテキスト自体を対象に引き据え、読んで見てはどうか、と思うわけなのです。

いったい、この読むという行為は、受動的なものではなく、端的に言えば、テキストとの関係性を内実としたすこぶる能動的な行為であることに気づかなくてはなりません。である以上、みなさんは、自分なりに書棚の一隅に静止しているテキストを手に取り、内的な視座をもとに船出してゆけばよいということなのですね。そもそも、テキストは、読み手のレヴェルに応じて世界をあらわにするのであって、要するに、そのようにもテキストという海は深く、読み手の主体的な向き合いをいかようにも受け止めてくれるのですから。

ここでは、例示として、平安日記文学から、『紫式部日記』の記事を取り上げ、読む行為のおもしろさといった点にちょっと触れておきましょう。

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうち霧りたる朝<sup>あした</sup>の露もまだ落ちぬに、殿ありか  
せたまひて、御<sup>みずあじん</sup>隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なる女郎花<sup>をみなへし</sup>のいみじう盛り  
なるを、一枝折らせたまひて、几帳<sup>かみ</sup>の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いとほ  
づかしげなるに、わが朝がほの思ひ知らるれば、「これ、遅くてはわろからむ」とのた  
まはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

女郎花盛りの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ

「あな疾<sup>と</sup>」とほほゑみて、硯召し出づ。

白露は分きてもおかし女郎花心からにや色の染むらむ

(本文引用は、小谷野純一著『紫式部日記』〈笠間文庫〉によります)

掲出したのは、寛弘 5 (1008) 年 8 月条で、藤原道長との歌の贈答に及ぶ、『源氏物語』の一場面を髣髴とさせる、あたかも物語世界のような記述になっています。紫式部は、仕える中宮彰子がお産をひかえ、実家の土御門邸<sup>つちみかど</sup>に退下したのに随伴してきているのです。

彼女は、いま、渡殿の戸口の自室である局<sup>つぼね</sup>から、朝霧がかかる早朝に南庭を歩く道長を見出しているのですが、すると、いま真つ盛りの女郎花の一枝を折って、道長が彼女の局に近づき、几帳の上からさし覗かせ、歌を詠むようにと命じたというのです。式部が、寝起きの顔をさらすのを気にしながら、ともあれ、硯のもとにより、<sup>したた</sup>認めたのが、「女郎花……」の歌なのでした。第 4 句中の動詞「分く」は、この場合、差別するといった程合いの意味でとらえておけばいいでしょう。としますと、歌全体は、

女郎花のいま盛りのきれいな色を見ると、露が差別している、何の輝きもないわたしの姿が思い知られます。

という詠になっていると解しておけば、一応、基本的には見誤りではありません。実のところ、上記の拙著が出るまで、学界での解釈は、ほぼこうした理解で済まされてきていました。

つまり、こういった読みであっても、テキストは異を唱えることはしませんし、先に言及していますように、そのレヴェルでの理解になるわけですし。

くどいようですが、もちろん見られるような読みでも何ら不当なのではないのです。しかし、このレヴェルにとどまるのではなく、表現の深みに立ち合いますと、訳出したとおりの読みでは、歌の皮相をなぞる臨み方でしかないという声がどこからか、おのれの内部に届くことになるのですね。読みという行為のレヴェル差がはっきりしてくるのです。

手数を省いたかたちで直言しますと、当歌の表現には、メタファー (metaphor) の仕掛けが構えられていることが透視されるのでした。このことばは、隠喩、暗喩などと和訳されていますが、比喩法としてのレトリックに属すについては、多言を要しません。わたしたちは、当該歌で、「露」に**男性**、また、「花 (女郎花)」に**女性**がそれぞれ託されている事に気づけば、表現の深層部を抉ることも可能になるわけです。古来、伝統的な表現の型のひとつに、このようなメタファーにもとづく表象があるのを想起すれば、さしあたり、こと足りえます。露の潤いよって花は美しい輝きを得るという見地を基礎構造とする比喩とっていいでしょう。例えば、『拾遺和歌集』(巻第3、秋) <sup>につしゅう</sup>入集の、次のような歌にも同趣の修辞が看取されます。

- a 女郎花にほふあたりに睦むればあやなく露や心おくらむ (おおなかとみのよしのぶ  
大中臣能宣)  
b 白露のおくつまにする女郎花あなわづらはし人な手触れそ (よみ人知らず)

a は、《女郎花が咲いているあたりに親しげに立ち寄ると、筋違いにも露が気を悪くするんじゃない?》といった内容の歌です。第5句中の「おく」には、「置く」と心隔てする意の「おく」が懸けられています。一方、後者の b は、《白露が置くよるべとしている女郎花だから、ああわずらわしいこと、だれも手を触れないでね》というような詠ですから、ともに、男女の性に立脚したメタファーの手法が組み込まれていることに関しては一目瞭然というようになります。

糸筋としては、すでに明らかになったはずですが、そうなれば、式部歌の表現の底には、男に分け隔てされたおのれのもとにはその訪れる姿もなく、女としての光輝も失せてしまった、乾ききった日常に日を送るだけだといったメッセージが籠められているという実相が解き明かされるわけですね。

これに対して、道長の返歌は、《白露は、別段、差別しているのではない、女郎花は自分の心によって、美しく色が染まっているのだろう》といった意の詠として位置づけられているのですが、贈歌の「露」と「花」の男女のメタファーとしての介在は、当然ながら踏まえられていますので、男とのかかわりを待つのではなく、おのれの心構え次第で輝きは得られるものだという切り替えしになることも忘れてはならないでしょう。

ちなみに、注記的に言い添えておきますと、もとより、式部の歌のみならず、道長の歌にしても宮廷世界に身をおく、男女の掛け合いを演じたおのおのの戯れですから、額面通り受け取り、実人生の地平に引き下ろしてしまっはいけません。うかがわれるような、咄嗟に言語遊戯に転入できるセンスというものも、宮廷人には、つねづね要求されていたのでした。

どうでしたか。今回は、『紫式部日記』の記載を例示し、読みの行為にいささか踏み込んで見ました。メタファーといったレトリックの仕掛けを見抜くことで、わたしたちは、さらなる解読の深みへといざなわれる向き合い、関係性に着目したつもりです。

古典文学に対する食わず嫌いといった状況に滞留する心を解き放ち、文学現象として、つまりは、一個のテキストとして向き合うと、時として、コペルニクス的転回とっていいほどに視角が転換され、思っても見なかった表現機構も顕現する、その感動に包み込まれるに違いありません。ゆくりなくも読みの愉悦に遭遇するはずなのです。

## 「スタンダード」新聞の日本海海戦記事

文学部日本文学科教授 藤尾健剛

昨年度、夏目漱石がロンドン留学中に読んだ新聞を調査するために、ロンドンに滞在した。「倫敦消息」(1901年5・6月)で、漱石は、「是から吾輩は例の通り「スタンダード」新聞を読むのだ」(一)と語り、4月9日の紙面に掲載されたいくつかの記事にも言及している。私の研究は、「スタンダード」の記事に当たり、漱石が言及している記事が実際にはどのようなものであったのかを確認するだけでなく、全滞在期間にわたる記事を調査することで、当時の英国社会の実情を探ることを目指したものであった。

漱石の滞英中に起こった主な事件を挙げると、ボア戦争と義和団事件の終結、ヴィクトリア女王の崩御や新国王の発病による戴冠式の延期、日英同盟の締結などがあった。英国史上の大事件が目白押しである。

このうち、最も興味深かったのは、やはり日本と関わりの深い日英同盟の締結(1902年1月30日)に関する記事であった。同盟が締結される1月ほどまえに、伊藤博文が英国を訪問した。伊藤の訪問は、1週間余りの短いものだったが、おそらくその期間に同盟締結の下準備がなされたのであろう。伊藤の訪英を伝える「スタンダード」の記事は、伊藤が建設者の1人となった若き近代国家日本に対する手放しの賞賛に満ちたものであった。中世的な国家体制から、わずか数十年で、ともかくも強国の1つに名を連ねるまでに成長した日本の「変化」を、「奇蹟」と呼んで讃えていた。若き日、密かに英国に渡り、近代化に必要な知識を身につけようと辛苦した伊藤個人に対する掛け値なしに好意的な論評も記されていた。「スタンダード」は政府系の新聞だったから、英国民の新生国家日本に対する心証を好ましいものにして、国民が同盟を歓迎して受け入れるための下地を整えるという意味合いもあったかもしれない。

この記事を読んで、私は、一種の高揚感に満たされた。日本人の1人として誇らしく感じた。この記事に気をよくした私は、漱石の留学期間からははずれることになるが、「スタンダード」が日本海海戦をどのように報じているかをぜひ知りたく思った。日露戦争中の1905年(明治38)5月27日・28日に、東郷平八郎の率いる連合艦隊が、ロシアのバルチック艦隊を壊滅させた、あの戦闘である。近代化の成功に対してさえ、あれほど賞賛の言葉を惜しまなかった同盟国の新聞が、日本国の新たな飛躍を画するこの戦果を、どのような形で讃えているかを、ぜひ知りたく思ったのである。

漱石の留学時期に関わる記事は、別の機会に発表する予定なので、ここでは触れない。日本海海戦の記事は、私的な関心に基づく予定外の調査であり、ここに紹介させていただくの

が好都合である。記事は 5 月 29 日（月）と 30 日（火）の両日に掲載されたが、後の方を以下に引用する。

「日曜日に届いた最初の報告によって日本人が得たと考えられていた控えめな成功は、後の、より信頼できる情報によって、『人類を呆然とさせる』ほどの勝利に変わった。バルチック艦隊——ロシア海軍と言ってもほぼ間違いないだろう——は、存在しなくなった。トーゴ提督は常に寡黙だ（中略）が、その特電のなかで、2 隻の戦艦、1 隻の沿岸警備装甲軍艦、5 隻の巡洋艦、2 隻の特別軍務船舶、3 隻の駆逐艦を撃沈し、2 隻の戦艦と 2 隻の沿岸警備装甲軍艦、1 隻の駆逐艦を拿捕したという戦果を主張している。撃沈されたなかには、ボロディノとアレキサンダー三世が含まれ、拿捕されたなかには、オーレルが含まれているようで、その結果、最新で最良の戦艦では、クニヤースワロフとオスラビヤがロシア側に残されているだけとなった。拿捕は、2 日目の戦闘の最中に行われたもので、トーゴ提督の特電の調子から判断すれば、水兵たちは、絶望して士気を失っていると推測できる。ネボガトフ提督と二千人の水兵は、旗艦船団によって捕虜にされたが、その他に千人以上の捕虜がいる。この数は、拿捕された船の乗務員をやや上回っているが、殺害されたり溺死したりしたロシア側の損耗数は、五千人に近いに違いない。戦闘はまだ終結していないが、ロシア艦隊は、取るに足りぬ戦力を除けば、ウラジオストックに最終的にたどり着けない公算が高いだろう。

机上の計算では、明らかに劣った敵によって一艦隊が、このように完膚無きまでに粉碎されたのは、どうしたなのであろうか。機雷が威力を発揮したと示唆されてきた。しかし、まず第 1 に、トーゴ提督の特電は、そうした考えを支持することには触れていない。第 2 には、日本軍が陸軍との通信線に非常に近い場所にこのような致命的な武器をばらまくというのは、そもそもありそうにない。トーゴ提督は、連合船団による攻撃について語っており、第 1 に、日没後、ロシア艦隊に向かって魚雷艇を発進させたが、成功とははっきり言えないほどの戦果だった。もっとも、電報の文言からは、小型船舶が軍艦を破壊したという仮説も否定できないようである。おそらく軍事行動に関する全報告のなかで、もっとも目立つ部分は、勝者の側の蒙った損失の少なさである。最高指令長官は、それを『取るに足りない』と述べている。現在、日本の戦艦は、ボロディノ級のロシア戦艦ほどには、装甲によってしっかりと守られてはいない。実際、トーゴ提督は、ほとんど必然的に装甲巡洋艦の一部を従えてきたので、その防衛力は、完全さに欠ける場所があったはずである。それゆえ、彼の艦隊が損傷を免れたのは、ファラガット提督の言葉によって一番うまく説明できるだろう。——『最も確かな防御は、お前たち自身の砲撃の影響力だ』というのがそれである。私たちの海軍特派員が、別のところで指摘しているように、ロシア戦艦の乾舷に激しい砲撃を集中し、こうして 12 ポンドの装甲皮膜を破壊することによって、ロシアの戦艦は、『無力な大型鉄の太鼓腹』として剥き出しのままにされ、駆逐艦や魚雷艇の攻撃に曝されたのであろう。土曜日と日曜日の出来事に関して、知るべきことはまだ残っているが、次の点は充分明



白である。すなわち、対馬海峡の海戦は、機械に対する人間の勝利を意味していることがそれである。トーゴは、金属の重量の優越性が、船上に水兵を配備した艦隊と陸上勤務者しか配備していない艦隊との相違の問題を帳消しにすることはできないと、戦闘中の報告に記した。技術と、大胆さ、節制、清廉な生活が、その報酬を手にしたのである。天性によって、また修練によって『海洋に慣れた』民族が勝利を得たのである。

トラファルガーの勝利の後継者は、たいていの他の民族とは異なり、トラファルガーの海戦の記念の年（トラファルガーの海戦は1805年—訳者）に、兄弟島嶼国民によって勝ち取られた勝利の意義を評価することができる。『大海原』の教訓が、またもや強調された。艦隊と艦隊が即座に戦闘に就ける用意を整えていることに、国そのものの安全性ばかりでなく、海の向こうの敵に打撃を与える能力までもが左右される。『牽制艦隊』の理論は、自由に動かせ、戦闘に突入できる艦隊を前提としている。トーゴが港に閉じこめられていれば、たとえ1隻も失わなくとも、制海権はロシアの手に渡り、それとともに、満州の陸軍の安全性も失われていたであろう。私たちは、名目上は優越している敵との海戦に全戦艦を動員して危険に曝した日本人の大胆不敵な自信を賞賛しなければならない。また、今や百度も示された、敵の心理に関する、驚くべき知識をも、賞賛しなければならない。トーゴ提督は、基地の近くにとどまることによって、彼が戦闘の結果を恐れているという考えをロシア側に巧妙に伝え、こうして敵をおびき出し、撃滅したのだった。彼は、敵に彼の計画通りに行動させ、彼の選んだ戦場で挑戦させたがゆえに、戦闘の大目的を遂行できたのであった。その結果が、非常な危惧を抱いていた世界中の人々を安堵させた。日本側の勝利の完璧さによって、戦艦アスコルドの上海抑留に伴う揉め事が蒸し返される見込みはなくなるであろう。日本人には、航海上恐れなければならないものがなくなったので、呉淞で武装解除された船の存在には無関心でいられる余裕がある。極東での地位を再建するロシアの最後の望みが潰えたので、ともかく今後数年は、平和が保たれる見込みが実質的により高くなった。しかし、私たちには、こういう推測を引き出すのが正しいかどうか、疑いたい気持ちもある。ファラオを除く他の君主たちが大敗北のなかに見出したのは、心を頑なにする理由だけである。」

# 俘虜収容所の遊びと憩いの交流

環境創造学部環境創造学科教授 川村千鶴子

はじめに

オランダの文化史学者・哲学者ホイジンガ<sup>1</sup> (Johan Huizinga, 1872-1945) は、「遊び」には、緊張と喜びと楽しさが同居し、人間の創造力の本質があると説いている。文化の諸側面にみられる遊びの要素を鋭く探究し、「遊び」は文化を創り出し、働かせ、守護する。しかも批判もするというように多機能的な創造の泉であるという遊びの持つ文化創造力を明らかにした。「ホモ・ルーデンス」(遊ぶ人) を概念化し、人間は普通の生活や仕事から乖離すればするほど、本質的な「遊び」を創出し、人間の本質が「遊び」にあると主張した。

本稿は、敵国の捕虜とともに憩う遊びを経験した日本人住民とミクロネシア人のオーラスヒストリーを聴取し、遊びと憩いの創造性を考察する。

## 第1節 戦争に起因する人の移動



【図1: 浅草本願寺でドイツ兵捕虜たちの記念撮影<sup>2</sup> 左端がボナペ兵士。修学旅行のようで、「俘虜」

を想像させるような悲慘な表情や姿ではない。出典：習志野市教育委員会】

第一次世界大戦は、1914 (大正 3) 年に勃発した。日英同盟をよりどころに日本は連合国側に立って参戦し、ドイツの根拠地・チンタオを攻撃した。マイヤー＝ワルデック総督以下 5000 名近いドイツ将兵がその時、日本の捕虜<sup>3</sup>となり、日本各地の俘虜収容所に収容さ

<sup>1</sup> ホイジンガ、J., 里見元一郎 (訳) (1989) 『ホモ・ルーデンス』ホイジンガ選集 1. 河出書房新社。

<sup>2</sup> 2000 年 6 月にボンペイにいたウイリヘルム (=ウイリアム)・ヘルゲンの娘パッシーバ (73 歳) がこの写真を見て、左端がウイリアムであることが判明した。

<sup>3</sup> 捕虜と俘虜とは、殆ど同義に使用されている。田村譲によれば、捕虜とは、一般的に、戦争や内乱で敵に捕らえられ、その権力 (支配) 下に置かれた軍人や民兵などの組織的武装集団の構成員 (傭兵・スパイを除く) をいう。戦前の日本では公式的には俘虜 (ふりよ) と呼ばれた。近代以前、捕虜は殺害、奴隷などの非人道的扱いを受けていたが、その後、人権思想に基づき人道的配慮がなされるようになった。日本でも明治維新以降、近代国家としての国際的地位の向上を

れた。捕虜の中には、日本に親善訪問に来る途中でたまたま開戦に巻き込まれてしまい、チンタオでドイツ軍に合流せざるを得なかったオーストリア・ハンガリーの巡洋艦の乗組員も含まれていた。つまり現在のオーストリア、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ユーゴ、北イタリアなどの多様な地域の出身者が、同じ「独軍俘虜」として日本各地を移動し、収容所に送られた。ドイツに占領されていた南洋群島ミクロネシア地域のポーンペイ島（旧ポナペ島）に暮らしていた 3 名のポナペ人も、ドイツ兵士として各地を回り、習志野俘虜収容所で暮らすことになった。

日本軍は、1899（明治 32）年の「ハーグ陸戦規則」などの国際条約を遵守し近代国家としての国際的地位の向上を目指していた。当時の俘虜収容所は、戦時国際法を遵守し、人道的に敵国の俘虜を扱い、母国との手紙のやり取りや地域社会との交流も盛んに行われた。収容所での生活と厚遇は、捕虜の日記や手紙に記述され、日独交流は現在までも続いている。図 1 の浅草本願寺の捕虜収容所でも、修学旅行のように「遊び憩う」ことが許されていた。

この史実を習志野市教育委員会は、帰還したドイツ兵たちの子孫から丹念な聞き書きを行い、翻訳し、歴史学に照らし合わせて編纂・編集した。

習志野市教育委員会編『ドイツ兵士が見たニッポンー習志野俘虜収容所 1915～1920』（平成 13 年、丸善ブックス）という一冊は、本の題名が示すように、多様な国々の兵士を包摂した「ドイツ兵士たち」が、「ニッポン」という島国をどのように見たのかに着目している。戦争の最中、俘虜たちと日本人住民たちが、相互に異文化に敬意を払い、「ともに遊び憩う」平和な共存を体験した稀有な史実である<sup>4</sup>。

初代所長・西郷隆盛の嫡子・西郷寅太郎大佐は、明治天皇の思召しでドイツの士官学校での留学経験をもち、ドイツ文化に深い理解を持ち、さらに、戦争の悲惨さや敗れた者のみじめさも、身をもってよく知っていた<sup>5</sup>。初代所長の後を継いで、第 2 代所長を務めたのは、山崎友造（筆者の祖父）もベルリン工科大学に 1902 年から 6 年間留学し、ドイツ文化と人びとに敬意をもっていた。

## 第 2 節 老親のオーラル・ヒストリー

戦後、新大久保の復興とともに生涯を生きた筆者の父親（明治 44 年生まれ）は、90 歳を過ぎたころ、ドイツ兵捕虜と遊んだ貴重な経験を話してくれた。

---

目指す観点から、国際法と欧米での戦争慣習の受けいれに努め、敵国捕虜の人道的保護政策積極的に説いた。それゆえ、日露戦争や第 1 次世界大戦（対独戦）に際しては、日本軍は 1899（明治 32）年の「ハーグ陸戦規則」などの国際条約を遵守して、交戦国の捕虜を人道的に取扱ったといわれる。

<sup>4</sup> 訳者・ディルク・ファン＝デア＝ラーン（Dirk van der Laan）と執筆者である星昌幸氏（習志野市教育委員会）が心血を注いだ。

<sup>5</sup> 習志野市教育委員会 <http://www.city.narashino.chiba.jp/siyakusyo/kyouiku/horyo/>

「大正8年、7、8歳の2年間は俘虜収容所の近くに住んでいた。日独戦争の後で、ドイツ兵士がいた収容所だった。転校まもないある日、僕は、ドイツ兵と遊んでいて父親に見つかってしまった。夕方になって、父<sup>6</sup>が後で部屋に来なさいと言ったので、叱られると思っていた。ところが、父は、にっこり笑って、こんな貴重な経験はないから、ドイツ兵に思いっきり遊んでもらいなさい。ドイツ語を習い、ドイツの体操を学ぶ絶好の機会だ。ドイツ兵と仲良くしなさいと励ましてくれた。その時は、もう最高に嬉しくて忘れられない思い出となった。父は、優しい人で俘虜をすごく大事にした。平和主義者だった。」



【図2：大正8年、ドイツ兵捕虜と「遊ぶ」経験を。中央が山崎隆。家族団欒のひと時。】

1919（大正8）年から翌年は、太平洋諸島の日本委任統治が決まり、ドイツでは、ワイマール憲法が制定されたころである。筆者は、近年になって当時の新聞記事や習志野俘虜収容所の大きなサイト「青きドナーの流れ」<sup>7</sup>を発見したのである。

### 第3節 捕虜との遊び

収容された約1,000名の将兵は、日本側が用意したバラックの他に、広大な構内にラウベ（あずまや）と呼ばれる小屋を作り、演奏会や演劇を行う野外ステージを作り、菜園を作り、ビールまで醸造して、多彩な生活を過ごしていた。



【図3：オーケストラの演奏会を定期的に行っている。Christian Bormann 所蔵】

<sup>6</sup> 1903（明治36）年ベルリン工科大学留学後、習志野俘虜収容所の第1代所長・西郷寅太郎の後を受けて、第2代所長に任命された。

<sup>7</sup> 習志野市教育委員会 <http://www.city.narashino.chiba.jp/siyakusyo/kyouiku/horyo/>

俘虜は自由にそれぞれの特技を紹介し、さらに研鑽を積むことができた。日本人と俘虜たちとの間に溝をつくらず、信頼を深め、異文化間交流の基礎を創った。敬意をもって多文化意識が萌芽されていった。

捕虜オーケストラは、収容所内で定期的に演奏会を開き、ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルト、ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」を演奏していた。演奏会を聴きにいった地域住民は、感動して実際に楽器のレッスンに通うことも可能であった。筆者の親族には捕虜の指導をうけて後に音楽家になった者がいる。

俘虜劇団はイプセンに挑戦し、仲間を講師にした「捕虜カレッジ」を開催し、映画の上映のための映画館もあった。日本の文化と文学に深い理解を持つ兵士は、日本の民話の翻訳に没頭した。彼らは、サッカー、テニス、ホッケーなどを楽しむばかりでなく、体育祭を開き、ドイツ体操とも呼ばれる「トゥルネン」で体力作りに励んでいた。



【図4：体育祭で地域の人々にドイツ体操を披露する捕虜たち Christian Bormann 所蔵】

俘虜たちの生活は、鉄条網の中に閉ざされていなかった。周辺の主婦たちが洗濯物の請負に収容所に通い、肉の仕入れに出たドイツ兵は、親切にしてくれる肉屋にハムやマヨネーズの製法を教えた。収容所への人の出入りが自由であり、ドイツ兵のソーセージ職人は、ソーセージ作りの秘伝を公開し、習志野は日本におけるソーセージ製造の発祥の地となった。コンデンスミルクの技術指導者、洋菓子作りの指導者なども知られている。

ドイツ兵が残した山梨県のぶどう園は、その後、サントリー山梨ワイナリーとなっている。日本に残ったドイツ兵のソーセージ職人は、東京・目黒にソーセージ工場を作り、ヨーゼフ・ヴァン＝ホーテンは明治屋でソーセージの技術指導を行った。



【図5：賛美歌を歌い、ともに祝う捕虜たちのクリスマス 出典：習志野市教育委員会】

1918（大正7）年、「スペイン風邪」によって、25名のドイツ兵と西郷所長が亡くなる。その年に第一次世界大戦はドイツの敗北をもって終結し、大正8年は帰国の年となった。ヴェルサイユ講和条約が発効され、兵士たちは収容所から帰還船の待つ神戸や横浜に向った。ワルデック総督が、部下の解放を見届け、最後の1人として習志野を後にしたのは、1920（大正9）年1月であった<sup>8</sup>。



【図6：別れの握手をかわすワルデック総督と所長山崎友造少将<sup>9</sup>、出典：大正9年1月26日読売新聞】

#### 第4節 ポーンペイ（旧称ポナペ）人俘虜の帰還

ドイツ領であった南洋群島の出身者3名の名前は、「ウイルヘルム（＝ウイリアム）・ヘルゲン（バーガー）」「ヨセフ ゲオルグ」「ヨセフ サムエル」である。名前はドイツ風だが、ポナペ島の原住民であった。この視力に優れた3名の青年は、見張り役としてチンタオに送られ、そのままドイツ兵として戦争に巻き込まれた。大勢のドイツ兵の中で、彼らはどのような気持ちで習志野の日々を送っていたのだろうか。外務省外交資料館の史料によると「習志野俘虜収容所ニ収容中ナル南洋人俘虜ニ関スル件照会」（大正8年10月25日）という文書が残されている。

「南洋ポナペ島土人ニシテ、嘗テ独逸官憲ヨリ青島ニ派遣セラレ造船業務ニ従事ノ中、日独戦争ニ会イシ砲艦『ヤグワール』ニ乗組、次デ我軍ノ俘虜トナリ、目下習志野収容所ニ収容中ナル左記三名ノ者ハ、此ノ際至急解放シ」

ドイツ兵よりも先に解放している。緑に恵まれた小さな島嶼から、突如戦乱の渦に巻き込まれ、大勢のドイツ兵士の中で、収容所の夜空を仰いで故郷への望郷の思いに駆られていたポナペ人たちが、帰国した後に何を語り継いだのだろうか。夜中に夢を見て叫び声をあげるポナペ兵がいたことをドイツ兵が後に語っている<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 習志野を後にした独兵には、山梨県のぶどう園の指導に招かれ、日本産のワインを育て、日本人にワインの楽しさを伝えた者もいる。ヘルムート・ケテルは、銀座でレストランを開業し、老舗の味として今日に至る。

<sup>9</sup> 山崎友造は、1919（大正8）年1月から1920年4月まで習志野俘虜収容所所長。少将に昇格。残務整理を終えた1920年4月に待命、7月に予備役として軍歴に終止符を打った。大正15年9月の葬儀、自邸には弔問の勅使が遣わされた。

<sup>10</sup> 『ドイツ兵士の見たニッポン—習志野俘虜収容所 1915～1920—』（2001年）丸善ブックス

クリフォード (2002 : 12) は、転地によって分節化される人間の差異、絡まりあった文化の経験、そしてますます密接に関連しているものの均質ではない世界の構造と可能性について着目している。さらに、転地という実践は、たんなる場所の移動や拡張ではなく、むしろ多様な文化的な意味を構築するものと捉えている<sup>11</sup>。筆者は、ポナペに赴き、捕虜の息子 (83 歳) からオーラル・ヒストリーの聞き書きを行った。日本統治時代、現地の人々を皇民化し属人的地位においた同化政策の歴史も浮き彫りになった。

水半球とよばれるオセアニア世界は、数万年前から千年前ほどにかけて人々が移り住んできた<sup>12</sup>。星と風を読み、万里の波濤をこえるカヌーの航海史は、太平洋が島嶼の人々を分かちつものではなく、一つに勇気づける偉大な海であったことを感じさせる。そして同化主義が常識であった植民地支配の歴史に対して、島々は断固、抗議し、「自由」への渴望を歌・踊りや伝統文化の中に表現してきた。ミクロネシア連邦は、独立とともに憲法の前文に、自由と自立にむけた決意を全世界に向けて表明している。

筆者は、2005 年 8 月、ウイルヘルム・ヘルゲンの子孫を訪ねるために、グアム経由でポンペイ島<sup>13</sup>に降り立った。かつて収容所で暮らしたウイルヘルム・ヘルゲンの息子の名前は、フレドリック・ヘルゲンバーガーといった。彼は、松葉杖をついてホテル<sup>14</sup>のロビーで待っていてくれた。83 歳には思えないほど頑強な身体の持ち主だが、耳が遠くて聞き取れない様子で耳に手を当てた。挨拶は何と日本語であった。以下は、捕虜ウイルヘルム・ヘルゲンの息子であるフレドリック・ヘルゲンバーガー (83 歳) の語り(日本語)の一部である。

「父からは、日本の捕虜収容所での生活は、実に居心地がよかったと聞いています。最初のころの食事は熱い日本食が多く、ドイツ人もポナペ人も馴染みがなかった。ドイツ料理は、冷めたものが多いことを伝えると、収容所では、次第に冷めた料理に切り替えるようにしてくれた。そして料理の得意なドイツ人は、厨房でドイツ料理をすることができたのです。・・・(中略)・・・」

日本での移動は快適な汽車に乗り、東京駅では、旗を振る子どもたちの歓迎を受け、捕虜収容所の生活はとても居心地がよかった。歌を歌い音楽や体操やゲームに加わることもできた。帰国を勧められたときは、帰国したい気持ちともっと日本にいたい気持ちと両方で複雑だった、と聞いています。」

---

11 クリフォード(2002, 10-23, 317-430)は、次のように説く。「だれもがいま、移動している。そして数世紀のあいだ、移動しつづけてきた。「旅のなかに住まう (ドウェリング・イン・トラベル)」ことを実践してきた。『ルーツ』は、この移動という前提から出発し、旅との遭遇こそ、未完の近代にとって決定的に重要な場だと主張する。—中略— それは、人間の場所が静止と同じくらいに転地 (ディスプレイスメント) によって構築されているという見方である。・・・」ジェームズ・クリフォード (2002) 『ルーツ—20 世紀後期の旅と翻訳』月曜社。

12 山本真鳥 (編) 『オセアニア史』山川書房

13 ポンペイ州は 25 余りの島々で構成され、主島ポンペイ島には州都コロニアのほか、ミクロネシア連邦の首都パリキールがある。

14 ザ・ビレッジ・ホテル (エコツーリズムで有名なホテル)

## おわりに

風化する歴史の記憶を呼び醒まし、島に生きた人々の転地と足跡を共に辿ることは、島の根源に復帰する途に繋がる思い出話であった。

習志野俘虜収容所では、「パン」「体操」「ドイツ語」「オーケストラ」「ソーセージ」「ワイン」「演奏会」「演劇」「ボトルシップ」といった新しい文化を創造した。俘虜との交流が後世の山梨のワイン工場、ユーハイムのバウムクーヘン、ソーセージとハム工場、音楽学校やオーケストラ団体の創設に繋がっている。

当時、ハーグ陸戦法規および捕虜の待遇に関するジュネーブ条約といった国際法を遵守し、各地の捕虜収容所で、遊びの時空を共有した。捕虜の厚遇の史実は、100年を経過した今、捕虜の子孫たちの研究によって、その史実と意義が公表されている。音楽・体操・料理・工芸品づくりといった「遊び」は、国籍や立場・身分、言葉の壁を超えて創造的なトランスナショナルな「遊びの空間」を創出したのである。

どんな境遇にあっても「遊びの空間」は人間らしさを表象する空間である。

謝意：貴重な写真を送ってくださったボン大学の Christian Bormann 氏に感謝の気持ちを記しておきたい。



## 「さわやかシェイプアップエクササイズ」で

### 健やかな心と身体を手に入れましょう！

スポーツ・健康科学部スポーツ科学科教授 馬渡照代

#### “体育”とは、 心と身体を育てること

大東文化大学に赴任してきたのが昭和49年のこと。以来、実技を中心に取り入れながら、自分の専門分野である『身体表現・リズムダンス』の体育教員を務めてまいりました。同時にNHK番組の中で行われていた健康体操の振付・指導を2年間担当したり、日本各地をまわって健康体操の特別レッスンをするなど様々な活動に参加させていただき、体育教員としてこれまで有意義に過ごせてきたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

“体育”というのは文字通り、“体を育てる”教科です。体は心と身体から成り立っているわけですから、その両方が鍛えられなければ“体育”とはいえません。したがって私がつねに目指しているものは、心と身体を育てるための教育。皆さんにすこやかでまっすぐな心と、健康で強い身体の両方を手に入れてもらいたいのです。

#### 失われつつある 心の豊かさを取り戻したい

私はこれまで何かをするときは必ず自分の足で出向き、自分の目で確かめ、人とふれあいながら何かを感じ取ってきました。そうすることで自分の中で確かなものが生まれるからです。ところがIT化が進み、インターネットや電子メールによる情報交換が当たり前になった近年、その場にいながらにして、相手の顔を見ることもなく様々なやりとりができるようになりました。技術の発展によって便利で効率的な世の中になったことは事実です。しかし、人と人とのコミュニケーションをなくして豊かな心は育つでしょうか？豊かな表情が生まれるでしょうか？モノにあふれ、世の中が便利になる一方、失われたものも多い気がしてならないのです。そして、それらがいろいろな社会問題の一要因にもなっているのではないのでしょうか？

## これからを 健康的に生きるために

このような現代をふまえ、人々が健康的な毎日を過ごせるよう、ひとつのエクササイズを作りました。それが『さわやかシェイプアップエクササイズ』です。このエクササイズは、ヨガやバレエ、太極拳といったいろいろな健康法をベースに、体育の現場で感じたインスピレーションを取り入れながら自分流にアレンジしたものです。“シェイプアップ”と謳っているのは、ただ身体のラインをすっきりさせようという意味ではありません。まずストレッチ体操で心と身体をまっすぐ伸ばす。そして、柔軟体操でやわらかな身体とゆとりのある心を身に付ける。さらには筋力トレーニングで強い心身に鍛えあげる。身体をのびやかにすることは自分自身を解放することにつながります。その結果、ストレスや悩み事までもが排除され、身体の健康はもとより心のしなやかさを取り戻すことができると思っています。

いわば『さわやかシェイプアップエクササイズ』はこれまでの私の集大成。どなたでも気軽にできるシンプルな動きのなかに体育教員としての活動と研究、そして自らの感性がすべて盛り込まれています。これからいきいきと健康的に過ごすために、ぜひこのエクササイズを生活に取り入れてみてくださいね。図書館で本を読んで疲れたときにもぜひどうぞ！

## エクササイズ

### ワンポイントアドバイス！

「さわやかシェイプアップエクササイズ」をするときは、  
次のことを意識するようにしましょう。

#### 動きを意識すること

自分のからだがどのように動いているのか、  
手や足の細部まで意識してみましょう。  
「考えて動かす」「丁寧に動かす」「真剣に動かす」、  
それが「からだの気付き」につながります。

#### 正しい呼吸法で行うこと

動きは息を吐きながらお腹を引き締めて。  
息を吸うことは意識せず、自然な呼吸法で。  
ひとつの運動を始めるときは息を吐きながら、  
動きを戻すときは自然体で呼吸するようにしましょう。

### 見て感じること

自分のからだと向き合い、自分のからだに耳を傾けながら、  
どんなからだになりたいのかを問いかけてみましょう。  
自分が映る等身大の鏡があるといいですね。  
意識を集中し、丁寧に行うことを心がけましょう！



エクササイズを続けることで心とからだに次のような効果が期待できます。

### ストレッチ効果

心とからだをしっかりと伸ばします。

### 柔軟性

ゆとりある心とやわらかなからだをつくれます。

### 筋力強化

生きていくための強い心と  
下半身、腹筋、背筋を強化します。

### バランスと持久性

これらの運動要素をバランスよく、  
ひとつのプログラムを心地よいリズムで続けていくことで、  
持久力アップにもつながります。

大東文化大学図書館報『大東 BOOKS』	
第 21 号	2012 年 6 月 30 日刊行
編集発行人	小谷野純一
連絡先	大東文化大学図書館
住所	〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
電話	(03)5399-7331
E-Mail	lib-all@ic.daito.ac.jp